

TOKONAME Meeting

フィールドは常滑！
ミュージアムでなにをする？
Our field of interest is Tokoname!
What can we do in our museum?



常滑を自分のフィールドとすることを
決めた人たち。
常滑で暮らし、つくり、人の輪を広げて
自分とまちの未来を思い描く。
生まれも、年代もちがう
4人のみなさんの目を通して、
見えてくる常滑とは。
そして、ライブミュージアムのこれからは。



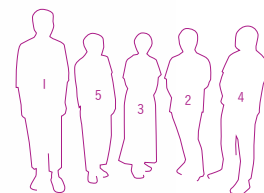
常滑って、どんなまち？

尾之内 まずは若いお二人にお聞きします。お二人にとって常滑ってどんなまちですか？

簗輪 常滑に来た時、海も近くにあって、いいところだなと感覚的に思いました。小さい時は金沢で、それから東京暮らし。高校の時に将来はものづくりの仕事がしたいと思って、いろんなところを見に行きました。金沢も好きだったんですが、九谷焼で細密のものが多くて。もっとおおらかなやきものが好きだったんだと思います。それで常滑にしよう。自分がやりたいことがやれそうな場所が常滑ということなのかな。

とこなめ陶の森陶芸研究所*1を卒業する時は、もう作家になろうと思っていたんですが、右も左もわからなくて、そんな時に陶芸家の吉川千香子*2さんにアシスタントに来ない？ と言ってもらいました。今は午前中は製陶所で働いて、午後は千香子さんのアシスタント、夜は自分の作業をする毎日です。

高橋 やきものまみれ、ですね(笑)。



語る人 簗輪孝治¹
陶芸家
稲葉直也²
名古屋市立大学4年
河合 忍³
TSUNE ZUNE 店主
高橋孝治⁴
プロダクトデザイナー

聞き手 尾之内明美⁵
INAXライブミュージアム館長



稲葉 僕の祖父は稲葉実^{*3}と言い絵と陶芸をやっていて、常滑市にもたくさんの作品が収蔵されています。祖父は僕が生まれる前に亡くなったので実は良く知らないんですが、やきもの関係の人に会うと「ああ、稲葉



左から簗輪孝治さん、河合忍さん、稲葉直也さん、高橋孝治さん、尾之内明美

さんのお孫さんか」って。それがけっこう驚きで。そもそも祖父は、陶業のまちにアートを持ちこむという新しい挑戦をした人で、常滑のまちと産業を新しい方向に変えようと、仲間たちといろんな取り組みをしたんです。当時の祖父がどんな思いで活動していたかはわかりませんが、そういうことを知って、自分もその思いを、形はちがうんだけど受け継いで、常滑のまちにかかわっていきたいと思うようになりました。

「千年の歴史あるやきもののまち」って教わるし、言葉ではその一言なんですけど、実は千年の歴史、伝統を大切に、それを自分のものづくりに生かしている方がたくさんいる。それが常滑だっていう実感が少しずつ湧いています。

ここにしかない「場」をつくる

尾之内 河合さんの「TSUNE ZUNE」は、シンプルな黒塀の外観が印象的なお店ですね。そして、この夏で10回目を開催された「トコナメハブトーク^{*4}」の会場でもあります。

河合 お店を始めたのは2014年。リノベーションした倉庫の中にカフェとイベントスペース。この場を面白がってくれる周りの方々が、トークイベントの企画や大学のゼミ発表会など提案・応援してくれてここまで来たという感じです。

その中でもトコナメハブトークはお店を始めた当初からコツコツ続いている企画で、歴代のゲストの方々は本当に素晴らしい方ばかり。さまざまな分野を通して“常滑”を見ることで、私自身“常滑”の魅力はどんどん増しています。お客さんも地元の方や移住者、陶芸家さんだったり世代もさまざま。日頃交わらない観

自分がやりたいことが、やれそうな場所。
それが、常滑。



3

4

- 1.2 廃業した植木鉢工場の2階、その一角を工房にする簗輪さん。広いスペースは現在3人でシェアしている。
- 3.4 簗輪さんの作品。「面」に魅力を感じるという簗輪さんがつくった花器

簗輪孝治

Takaharu Minowa

出身は金沢市。東京で育ち高校卒業後とこなめ陶の森陶芸研究所の研修生に。現在は陶芸家吉川千香子さんのアシスタントをしながら自分の作陶活動に没頭する日々。



5

河合 忍
Shinobu Kawai

常滑生まれ常滑育ち。盆栽鉢梱包作業の倉庫をリノベーションしてカフェとイベントスペースを持つTSUNE ZUNEをオープン。「この場が常滑の日常になれば」と思いが込められた店名。

「常々さん」って呼ばれるのは、うれしいです。



7



8



6

- 5 TSUNE ZUNEの前で。
- 6 カフェスペースで開催されたハブトーク
- 7 イベントスペース やきもの作家の個展が行われていた。
- 8 中では、夜更けまでわいわい語り合う。



客同士の交流が生まれるのもうれしい副産物です。常滑にはいろんな人が暮らしているなあと、お店を始めて実感しています。場があることで、みなさんと共有できるのがとても楽しいし、うれしいです。

店の名前にもなっている“常々”は常滑の日常・普通を含んでいるんですが、人に使ってもらうことでそれが叶った感じがします。最近では、自分の名前ではなく「常々さん」って呼ばれるようになって、この場所が前に出てきたようで、密かに喜んでいます(笑)。

稲葉 やっぱり地元で、ざっくばらんに語り合える場があるのはうれしいです。

箕輪 家で寝転がっているより来た方が楽しいですね。

高橋 僕にとって、忍さんの「TSUNE ZUNE」は普段からハブそのもので。作家さん、職人さん、まちの人が休息をしに来て、自然と集まって話が始まったり。世代が幅広く、年配の方々の話には特に聞き入ってしまいます。加えて、ハブトークは市内外の新しい人をどんどん迎えて、にぎやかなハレの日ですね。

よそ者の目が新しい常滑を見据える

尾之内 高橋さんが仕掛ける「とこなめ焼DESIGN SCHOOL*5」は、今年2年目ですね。

高橋 常滑市には故伊奈長三郎さんが「常滑の陶業陶芸の発展のために」と寄贈された自社株式の配当金を元にした基金*6があり、常滑市立陶芸研究所(現とこなめ陶の森陶芸研究所)の設立や長三賞などが生まれました。私は常滑市の陶業陶芸振興事業推進コーディネーターを務めており、基金の活用について助言などを行っています。その取り組みの一つとして「とこなめ焼DESIGN SCHOOL」を行っています。公募で集まった研修生が約10ヶ月、常滑のまちやものづくりの歴史をひもとき、気づきを得て自身の興味・関心とつなげてプロジェクトを生む人材育成事業です。

私はよく、伊奈長三郎さんが今生きていたら、常滑焼のためにどのようなことをされるかと自分に問いかけます。それをかたちにしていくのが自分の役割でもあると思っています。その上で心がけていることは、常滑というまちや常滑焼という産業の現状と歴史を俯瞰して見ることです。知多半島の風土に育まれ、約千年この常滑でやきもの産業が続いている間に、要になる無数の「点」が存在します。それは人、グループ、場、素材、製品、発明、技術、仕組みなどです。「常滑焼って何?」と聞かれた時に一言で答えられないのはそのためですが、紛れもなくその「点」の連なりが常滑焼です。それらを可視化して、その流れにどんな新しい「点」を生めるか。そのようなことを考えています。

河合 私は高橋さんが常滑に来られてから、外に向かって見えやすくなった印象を持っています。

高橋 もう一つ大事なものは、領域を超えて「点」を生み出していくことだと思います。常滑焼の千年の歴史は革新の連続で、これまでにない技術や人材を受け入れ、共有する寛容さを持って成長してきました。その精神は今も続いていると思います。私のようなよそ者も受け入れてくれるし、常滑の歴史を面白がり歴史を掘り下げている若い世代もいるし。忍さんのように生まれ育ったまちで場作りをして、市内外のいろんな世代の方々の関係を育んでいる方もいて。

今後、常滑の陶業陶芸と他の分野に点在する可能性みたいなものが見いだされ、領域をまたいでものづくりの協同が始まると良いなあと思っています。そのためには俯瞰するだけでなく私自身、寄りの視点で見たり聞いたりすることも同時にしなくてはなりません。

昔ながらの常滑が消えている!?

簀輪 常滑は土っぽさがあるまちだなと、来た時から思っています。昔はもっと土っぽさがあつたと聞き、常滑のまちの特徴が無くなりつつあると感じます。もっと行くところまで行けばいいのになって思っちゃいますけど。そこが常滑の原点でもあり、いいところなのに。

稲葉 常滑の土っぽさというのは、生産の場、工場の景観から来ているんじゃないでしょうか。町家や商家は先祖が建てて代々守ってきたものなので、皆が大切にしようと思う。でも常滑は工場なので、景観として守ってきた意識はないし、道が細く入り組んだ土地柄で建て替えが進まず、たまたま残っちゃった。だから、まちの人に、ただの工場でしょみたいな感じで、あんまり価値を感じてもらえず、どんどん取り壊されている。

簀輪 常滑の建物って、ほんとに、どん、どんって力強く建っていて、それがすごく常滑らしいと思っています。建物を見れば常滑の持っていた土っぽさを感じます。ライブミュージアムの展示として、外の建物とリンクさせて何かするっていうのはどうですか。僕の工房は昔植木鉢を作っていた工場の2階です。そういう昔の建物でライブミュージアムの企画展に関連するイベントや展示を行うことで、新しい建物の使い方ができると思います。建物が壊されるのはもったいない。

高橋 常滑市は転入者が増えて人口が59,000人を超えましたが、何人が常滑に土っぽさを感じるでしょうか。価値が伝わらないから全く無くなっていいという事ではいけないと思います。だからこそ、常滑固有の風土や文化を大切に思う方々でじっくり議論し、行動を起こさなければいけないと思います。今ここで稲葉さん

伊奈長三郎さんが生きていたら、今の常滑に何をするだろう。



9

高橋孝治

Koji Takahashi

大分県生まれ。(株)良品計画で無印良品の生活雑貨の企画・デザイン等にかかわる。出会った人の縁で2015年常滑に移住。自治体、企業、つくり手をつないで多くのプロジェクトが進行中。六古窯日本遺産プロジェクトのクリエイティブ・ディレクター。



10



11

12

9 最初は急須製造工場、その後うどん屋、そして今は高橋さんの事務所に。

10 この事務所が「とこなめ焼 DESIGN SCHOOL」の熱い議論の場

11.12 事務所は「やきもの散歩道」のなか。常滑らしい風景がすぐそこに。



INA Xライブミュージアム





稲葉直也
Naoya Inaba

常滑育ち。「とこなめ焼
DESIGN SCHOOL」第1期生。
現在は高橋孝治さんのアシス
タントとして常滑にかかわる。
名市大生が運営する名古屋駅
西商店街「駅西あさごはん」
の活動にも参加。

常滑には、千年の歴史をものづくりに
生かしている人がたくさんいる。



14

13 「やきもの散歩道のような観
光の場所だけでなく、土管坂
は常滑の日常の風景」と、自
宅付近を案内してくれた稲葉
さん。

14 「とこなめ焼DESIGN SCHOOL」
でまとめた「常滑エリア
リサーチ」



とこなめ陶の森 陶芸研究所

と箕輪さんが議論しているのはとても大事なんじゃない
でしょうか。

常滑のなかのライブミュージアム

尾之内 私たちは企業ミュージアムとして、企業の強
みを生かして常滑の魅力を広く発信したいと思ってい
ます。館長になったばかりですが、このミュージアム
だからできることを、もっともっと探していきたいん
です。TSUNE ZUNEさんのように、ハブとして機
能を高めて、常滑の人にも活用してもらえるミュージ
アムをめざしたいと考えています。

高橋 謙遜されましたが、間違いなくここはハブだ
と思います。常滑のやきものの歴史が知れる二大スポッ
トは、とこなめ陶の森とライブミュージアムです。と
こなめ陶の森は中世以降のやきものを現代まで時系列
で見ることができ、ライブミュージアムは土管や建築
陶器、衛生陶器をそれぞれじっくり掘り下げることが
できる。常滑に来る人には必ず案内する場所です。

今後は点在しているスポットを、線や面にして見せ
ることが大切だと思います。一から知りたい人には、
まず、とこなめ陶の森を見てその後にライブミュージ
アムや、やきもの散歩道。籠池古窯や高坂古窯址から
始めるコースもあると思います。訪れる人の興味や関
心に合わせて常滑焼の見方を提案できると良いと思い
ます。それには各施設が連携しなくてはいけない。今
ある資源を活用してそういったおもてなしができるか
どうか。産業の現状から以前のような大規模な開発が
むずかしい中で、私たち世代が知恵を出し合い実践し
ていくことが大事だと思います。

尾之内 このミュージアムが、常滑を元気にする場の
一つとして、あり続けたいと思います。今日はありが
とうございました。

- *1 **とこなめ陶の森**: 資料館、陶芸研究所、研修工房の3施設の総称。資料館では常滑焼の窯業に関する資料を、陶芸研究所・研修工房では平安時代末期から現代までの常滑焼などを展示。研修工房では全国からのやきもののつくり手を志す研修生が学ぶ。研究所の建物建築家堀口捨己の設計で、全国から建築ファンが訪れる。
- *2 **吉川千香子**: 陶芸家。日常使いの器から造形まで、かろやかな作風が多くの人を惹きつける。1974年から常滑移住。日本、世界各国で作品を発表している。
- *3 **稲葉 実**: 1929年常滑市生まれ。陶芸家から画家へ転身。1950年自由美術展出展。1960年主体美術協会結成。30代に渡米してアメリカ・メキシコを回る。1993年没享年64歳
- *4 **TOKONAME HUB TALK**: TSUNE ZUNEのリノベーションを手掛けた建築家水野太史さん、デザイナー河合秀尚さん、河合忍さんが運営するトークイベント。常滑内外、いろいろな分野で面白い活動をしているさまざまな人を交えて、その活動のことや常滑のことを、ざっくばらんに語り合う。
- *5 **とこなめ焼DESIGN SCHOOL**: 常滑市陶業陶芸振興事業基金を活用した人材育成事業。高橋さんがプログラムディレクター。やきもののつくり手、売り手、使い手といった分野を越えた研修生が常滑焼の新しいあり方を考える。
- *6 **常滑市陶業陶芸振興事業基金**: 故伊奈長三郎（伊奈製陶（のちのINAX）を設立から寄贈された自社株式の配当金を基金として、昭和47年に設立

TOKONAME Meeting

Our field of interest is Tokoname! What can we do in our museum?

Peoples who have settled in Tokoname because of their fields of interest, who live in Tokoname, engage in creative activities, increase the human connection, and imagine their personal futures as well as the city's future. The following four persons, with different birthplaces and ages, talked about Tokoname and the INAX Museums.

Panel **Takaharu Minowa** Potter
Naoya Inaba Nagoya City University student
Shinobu Kawai Owner of Tsune Zune
Koji Takahashi Product designer

Interviewer **Akemi Onouchi**
 Director of the INAX MUSEUMS



What is Tokoname for the younger generation?

Minowa: When I was a high school student, I wanted to be engaged in manufacturing in the future. And I have visited various places for the purpose of observation. When I came to Tokoname, I instinctively felt that this was a good place, for example because the sea is nearby. The place I feel I can do what I want to do, is Tokoname.



Inaba: My grandfather was a painter and potter. He was a pioneer, who introduced art into a city of the ceramics industry. I was inspired by this aspect of him who died before I was born, and I became interested in community development in Tokoname. I want to take over my grandfather's legacy, even though I might represent it differently, and to engage myself in the city, Tokoname.

Creating a new identity for Tokoname

Kawai: We held a successful tenth public talk, "Tokoname Hub Talk," in which we discussed construction and community development. Previous guests that we have hosted from various fields have all been fantastic. I myself have become more fascinated by this city after learning from their respective points of view of Tokoname. On top of that, the audience, who usually has few chances to communicate with each other in everyday life, have interacted with each other, which is a nice by-product of these talks. It is my pleasure to provide a place that can be shared with like-minded people.

Inaba: It is a pleasure for me to have a place where I can have a frank talk with companions, in my home town.

Minowa: It is more fun than just lying around at home.

Takahashi: For me, Shinobu's Tsune Zune is the perfect hub. People with various attributes, such as craftsmen, creators, and citizens come together to get to know the past and current Tokoname. Tsune Zune is a place for people who want to feel Tokoname's identity.

What is the new Tokoname like from a stranger's viewpoint?

Takahashi: I have launched several projects, including "Tokoname Ware Design School," in which Tokoname city and producers of ceramic wares are involved. I can take an overview of Tokoname because I am a stranger. In other words, I am looking at how to connect humans and resources "dotted" around Tokoname to follow on from the thousand-year-old industry in a favorable way.



Takaharu Minowa

Born in Kanazawa. He grew up in Tokyo and, after graduating from high school, became a trainee in the Tokoname Tounomori Ceramic Art Institute. After completion of his training, he stayed in Tokoname and has been creating pottery.



Shinobu Kawai

Born and raised in Tokoname. She renovated a 60-year-old warehouse to open the café Tsune Zune, which is used also as an events space.



Koji Takahashi

Born in Oita. He moved to Tokoname in 2015. He works on various projects through facilitating self-governing bodies, corporations, and creators to join forces. He is a program director of the Tokoname Ware Design School.



Naoya Inaba

Born in Tokoname. He is in the fourth year at the School of Humanities and Social Sciences, Nagoya City University, and is a first-generation student of the Tokoname Ware Design School. He has deepened his attachment to his hometown, Tokoname.

A sense of crisis related to the gradual disappearance of the traditional Tokoname

Minowa: I think Tokoname is an earthy town, but now such earthiness is progressively disappearing and the city is becoming commonplace. Earthiness is Tokoname's origin and strong point.

Inaba: Tokoname's earthiness may derive from a being place of production, in particular a townscape of factories. Town people do not much value such factories, which are increasingly being demolished.

Minowa: My workshop is on the 2nd floor of a former flowerpot factory. Old buildings like these can be brought back into use by holding events relating to INAX Museums exhibitions. It is wasteful for such buildings to be demolished.

Takahashi: Over the last few decades, Tokoname has been turning into a commuter town. Nowadays, how many people in Tokoname, a city of 59,000 people, associate Tokoname with the clay? They are already a minority. If no one cares about such a minority disappearing, Tokoname will become just an ordinary city. People who love Tokoname's earthiness have to protect this city as a team.

Future INAX Museums

Takahashi: Two major spots are the Tokoname Tounomori and the INAX Museums, where the history of Tokoname wares is visualized. These are places people really must visit. It is important to look again at Tokoname ware in the context of its entire history. So facilities should be exhibiting not alone but with the sense of connectedness. For this purpose, the relevant facilities should act as a united body to entertain visitors.

Onouchi: We are a corporate museum. We want to introduce and widen the appeal of Tokoname by taking advantage of strength as a corporation. I just became a director and am investigating further what this museum can do. I hope this museum will continue to be a place that contributes to Tokoname's liveliness. Thank you for being with us.